

投与した L-8-VP test は Cushing 病 Hardy 手術後の follow-up に有用である可能性が示唆された。

特別講演

クッシング病の治療について

岸和田市民病院
院長 景山 直樹 先生

第26回新潟化学療法同好会

日時 昭和62年6月20日(土)
午後3時
会場 ホテルイタリア軒

一般演題

1) HIV 抗体の検出状況について

星野 弘之・嶋津 芳典
五十嵐謙一・田崎 和之 (新潟大学第二内科)
庭山 昌俊・和田 光一
荒川 正昭

私達は、昭和62年2月1日より外来受診者の HIV 抗体測定を開始した。昭和62年5月末までの外来受診者は、男性134名、女性46名計180例で、受診動機は、異性交118例(うち外国人と56例)、男性同性愛10例(うち外国人と1例)、風俗営業の女性9例、輸血・血液製剤使用者22例、ビザ取得のため2例でした。外来受診者においては、HIV 抗体は全例陰性でした。尚この他、他施設からの37例で1例 HIV 抗体陽性例を認めましたが、その症例は血液製剤使用例でした。

2) 臨床分離菌の ofloxacin 感受性の推移

尾崎 京子・高野 操 (新潟大学検査部)
小柳 典子・狩野 倫佳

私達は最近の臨床分離菌の OFLX 感受性について、1985年のデータと比較し、その推移及び耐性菌について検討したので報告する。ディスク感受性で $\#$ 以上を感性とし、感性率を集計した。

S. marcescens は1985年が86.7%でその後が71.7%と低下していた。*P. aeruginosa* は93.3%が84.2%へ、*S. aureus* は100%が87.0%へと低下していた。*S. marcescens* を除く腸内細菌9菌種、*H. influenzae*、*S. pneumoniae*、*B. catarrhalis* はいずれも95%以上の高い感性率であった。

耐性菌の増加していた菌種について検討した。

P. aeruginosa は入院より外来の方が分離頻度が高く、外来の多くは喀痰由来株だった。*S. aureus* は逆に入院での分離頻度が高かった。検体別では全体に尿からの分離頻度が最も高かった。*S. aureus* の CEZ 感性株と CEZ 耐性株で OFLX の耐性を比較したところ、CEZ 耐性株で有意に OFLX 耐性株が多い(18.8%)という結果が得られた。

3) New Quinolone 剤の眼科的応用

一点眼剤について

大桃 明子・坂上富士男 (新潟大学眼科)
田沢 博・大石 正夫

新キノロン剤である Norfloxacin (NFLX) 点眼剤の基礎的・臨床的検討を行った。

家兎眼を用いた 0.3% NFLX 点眼液 2滴 1回点眼時の経時的結膜嚢内滞留濃度は5分後 1340 $\mu\text{g/ml}$ で15分後 1/2, 30分後に 1/4 となり以後すみやかに減少したが6時間後でも 8.3 $\mu\text{g/ml}$ 証明された。同剤 2滴 5分毎 5回点眼時の眼組織内濃度は正常家兎眼で外眼部組織に 0.38~7.84 $\mu\text{g/g}$ 、眼球内部に 0.01~0.68 $\mu\text{g/g}$ 、炎症眼で外眼部に 0.23~39.8 $\mu\text{g/g}$ 、眼球内部に 0.01~41.5 $\mu\text{g/g}$ の移行がみられた。正常眼では角膜に、炎症眼では角膜・前房水に高濃度を認めた。

これまで行われた 0.3% NFLX 点眼薬の pilot study の成績では、累積有効率は NFLX 1日3回点眼群で 89.1%、1日4回群 87.3%、MCR 点眼群 88.1% であり数値的には NFLX 1日3回群が良好であったが統計的には各群間に有意差はみなかった。この秋に発売予定の OFLX 点眼液の pilot study の成績は、0.3% OFLX 群で 98.5% の累積有効率で、0.5% 群 97.5%、MCR 群 89.8% で統計学的に 0.3% 群で MCR 群より有意にすぐれていた。その他の各群間に有意差はみられなかった。

4) 抗生物質の蛋白結合の研究

庭山 昌俊・星野 弘之
嶋津 芳典・田崎 和之 (新潟大学第二内科)
五十嵐謙一・和田 光一
荒川 正昭

セフェム系抗生剤から蛋白結合率の高い Cefazolin (CEZ) を選び、CEZ の血清蛋白結合の基礎的検討を行った。蛋白結合率の測定は遠心限外濾過法で行った。

CEZ の濃度と蛋白結合の関係の検討では、濃度が 10~100 mcg/de では、蛋白結合に殆んど影響はなかつ